

府中かんきょう 市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報
2006年 夏号 7月12日発行/季刊
発行人：進藤 禮治郎
連絡先：府中市日新町 4-5-24
TEL 042-366-2134

転機に立つレンゲまつり

○レンゲまつりをふりかえる

2001年から始まったレンゲまつりは今年で6回目となり、市民の間にすっかり定着してきたようです。2004年にはその努力が認められて府中市から「都市景観賞」をいただきました。これまでのレンゲまつりをふりかえて、6年間の経緯を表(2頁)にま

とめてみました。これを見るとイベントの内容も毎年同じことをやっているのではなく、すこしずつ進化している様子がわかります。レンゲの作柄は年によってずいぶん違ってきます。ひどい時はレンゲの花がほとんど咲かず「草祭り」となったときもあります。

今年は数年ぶりに見事に花が咲きました。レンゲの花が一杯の会場では、親子で花を摘んだり、花飾りを作ったり、レンゲを見ながらお弁当を食べるほほえましい姿があちこちでみられ、まつりの主役はやはりレンゲの花だなあ、と強く感じました。かつてレンゲ田はこどもたちの格好の遊び場でした。花飾りをつくったり、寝転んで小鳥のさえずりを聞いたり、草笛を吹いたり…。このことを踏まえイベントの内容は、できるだけ自然を使った昔遊びができるように工夫しています。レンゲまつりのねらいの一つは遊びをとおして、自然との交流の場を提供することにあると考えたからです。

< 2 頁へ続く >



⑥

自転車通行に危険な旧甲州街道

先日、自転車で現場を通行中たいへん怖い思いをしました。この現場でトラックが2台続けて私を追い抜いて行ったからです。誰が見ても自転車の通行は危険とわかっているにもかかわらず改善されません。

府中市のごみ減量推進課は、ごみボックスをもう少し電柱から離して置きましょうというだけで、旧甲州街道を管理する東京都は電柱の位置は適法で電力会社に移設を強制できないと答えるのみです。事故が起きたら行政には責任がないのでしょうか。事故が起きないと対策は何も進まない怖い現場です。

<写真> 若松町2丁目の旧甲州街道



レンゲまつりの経緯

開催年	レンゲの作柄	参加人数	イ ベ ン ト	特記事項
第1回 2001/4/30 雨	普通	約150人	草笛づくり・蜂蜜ドリンクの試飲・竹とんぼづくり・押し花づくり・府中産野菜の販売・ネイチャーゲーム	雨天のため押立体育館会議室で開催
第2回 2002/4/28 晴	良好	約600人	草笛づくり・花飾り遊び・竹とんぼづくり・わら草履づくり(新)・府中産野菜の販売・蜂蜜採取実演と販売(新)・ネイチャーゲーム・写真展示(新)・国立市/三鷹市の自然観察会(新)	市内レンゲマップ作成
第3回 2003/4/26 晴	普通	約600人	草笛づくり・花飾り遊び・竹とんぼづくり・わら草履づくり・府中産野菜の販売・蜂蜜採取実演と販売・ネイチャーゲーム・写真展示	市内レンゲマップ作成
第4回 2004/5/1 晴	不良	約600人	草笛づくり・花飾り遊び・竹とんぼづくり・わら草履づくり・府中産野菜の販売・蜂蜜採取実演と販売・ネイチャーゲーム・写真展示・花電車(新)・レンゲ田を探そう(新)	「レンゲまつり」都市景観賞を受賞
第5回 2005/4/23 晴	不良	約600人	草笛づくり・花飾り遊び・竹とんぼづくり・わら草履づくり・府中産野菜の販売・蜂蜜採取実演と販売・ネイチャーゲーム・写真展示・市内のレンゲ田情報(新)	アルファルファタコゾウムシの棲息確認
第6回 2006/4/22 晴	良好	約600人	草笛づくり演奏・花飾り遊び・竹とんぼづくり・わら馬づくり・わら草履づくり・府中産野菜の販売・蜂蜜採取実演と販売・ネイチャーゲーム・写真展示・レンゲ田情報・田んぼの草花観察会(新)・紙芝居(新)	タコゾウムシ対策に苦慮



○レンゲを育てること

この数年、レンゲの生育が悪い状態が続きました、2年前にはレンゲの花はほとんど見られず、「レンゲ祭り」でなく「草祭り」と自嘲したほどでした。南町のレンゲ田でいただいた花をプランターに植え付け展示したこともありましたが、一面のレンゲ田を期待して、わざわざ電車に乗ってきた人から「レンゲはどこにあるの?」と聞かれて困ったこともあります。「花より団子」といっても、やはりある程度咲いてくれないと、訪れる人の期待を裏切ることになるし、私たちスタッフの意気も上がりません。

生育が悪かった最大の原因は、播いた種子が発芽しないためでした。レンゲは自宅のプランターで育ててみるとよく発芽し、花もたくさん咲きます。家庭では播種した後、適度に灌水をするからです。ところが、田んぼでは播種したあと何日も雨が降らず、種子が乾燥し発芽できないことがしばしば起きます。稲刈りをする前に播種をする農家が多いのは、田んぼに湿気がある間に発芽させようとしているのだらうと思います。

逆に長雨による弊害がでるときもあります。2004年の秋は記録的な長雨が続き、1カ月で1年の総雨量の半分が降ったほどでした。こうなると田んぼはプール状態となり何日も水が貯まってしまい発芽できなくなります。自然の影響をまともに受ける田んぼで、レンゲを育てることの難しさを、いやというほど知らされました。

昨年の秋は、今までの苦い経験をふまえて、3回に分けて播種しました。第1回は稲刈りをする前の9月27日に2回目、3回目は稲刈りが終わった10月17日と10月25日に播きました。種子の量もこれまでの4倍に増やしてもらいました。その結果、除草がほとんど必要ないほどにびっしりとレンゲが芽生え、花も期待どおり美しく咲いてくれました。

○レンゲの大敵
アルファルファタコゾウムシ

アルファルファタコゾウムシ(以下タコゾウムシ)の生態については前年の会報で詳しく解説していますので、その後の状況について述べたいと思います。

私たちは東京都の病害虫防除所の指摘で、押立町の田んぼにもタコゾウムシが発生していることを昨年初めて知りました。

<3頁へ続く>



今年3月になってレンゲの葉や茎を注意深く調べると長さ2～3ミリの小さな幼虫が沢山見つかりました。この段階では被害はさほど目立ちませんが、その密度からして、相当の被害が広がることが予想されました。岐阜県の農業技術研究所の話で、田んぼに水を入れて3日間湛水すると防除に効果があることがわかりましたが、これを実施するには水の供給などいろいろな問題がでてきました。そもそも3日間レンゲを水浸にしたら、その生育に相当なダメージを与えかねません。そこで、3月20日、田んぼの持ち主の戸塚さんの了解を得てアブラムシ類などに有効でタコゾウムシにも効く有機リン殺虫剤(細粒)を散布しました…葉茎に吸収され約1か月間有効とのこと。

4月中旬に市内のレンゲ田6カ所を回ってみたところ、その全てにタコゾウムシが見られ、被害の少なかった押立町を除きひどく食害されており、殺虫剤の効果を確認することができました。レンゲまつりの後、押立町のタコゾウムシの広がりを追跡調査した結果、5月の初旬まで美しく咲いていたレンゲが、わずか1週間後の5月11日には、見るも無残に食害され、幼虫は成長してほとんどがまゆになっているようでした。多分4月末くらいで薬効がきれたのだらうと思われます。被害が全国的に広がっているタコゾウムシは、レンゲの栽培農家にとって容易ならざる害虫で、今後の対応の如何によってはさらにレンゲ田が激減することが考えられます。



○こどもたちの未来のために

府中のレンゲ田は昨年と同様全部で6カ所でした。しかしまともに花が咲いていたのは押立町と南町の2カ所だけでレンゲマップをつくっていた2003年頃と比べると箇所数だけでなく、花の状況も格段に悪くなっています。

かつて府中市にはあちこちにレンゲ田がひろがり、ヒバリがさえずるのどかな風景がありました。私たちは、レンゲに象徴される「ふるさと景観」を府中に残したいという願いからレンゲまつりを始めました。しかしながら、市内のレンゲ田は、まつりが市民に定着するのと逆行するように減り続けています。タコゾウムシの被害がこれ以上ひどくなると、押立町が最後のレンゲ田になってしまう惧れも、あながち杞憂といえないかもしれません。



私たちはレンゲまつりを成功させると同時に、もっと市内のレンゲ田の状況に目を向けて、これを守るためにできることは何か、レンゲまつりのあり方を含めて、十分議論を深めていくべきだと思います。その上で行政や農家の方々と話し合えば、連携して問題に対処していく可能性が開けてくるのではないのでしょうか。ふるさと景観のシンボルであると同時に、こどもたちの自然との接点であるレンゲ田を、府中に残していきたいと思います。こどもたちの未来のために! (野口 道夫)

初の環境フェスタ

テーマは暮らしと温暖化

環境の日にちなみ、「府中環境フェスタ」が6月3日、グリーンプラザ分館とフォーリス前広場で開催されました。

今回のイベントテーマは「温暖化」で、「ストップおんだん館」を見学(2/28)して、温暖化をテーマにした「エネルギーのかばん」で、参加型ワークショップのレクチャーを受け、キットも借りて、展示・実演しました。

アメリカ、日本、中国の3カ国における国民一人当たりの一日分のエネルギー消費量(石油換算、kg)をかばんに入れて、重さを比較体験しながら、それを切り口に対話するという趣向です。さらに話題として24時間営業のコンビニ、自動販売機の数など日常生活と温暖化との関わりを考えてもらうプログラムです。

当日の参加は100人。関心度は大人や子ども、またレベルにバラツキがあり、即座にプログラムをアレンジしなければ対応できないことを痛感しました。

けやき消費者の会で出展された「生ごみ処理機による堆肥づくり」コーナーは、当会も全面協力しました。また当会々員が出展グループの、ひばりの会、かんきょう塾ネット、市民酸性雨調査の会、のそれぞれのグループメンバーとして活躍しました。

来場市民の環境意識は相当高いものの、一般的には温暖化の言葉は知っていても、日々の生活と温暖化が直結し、自分たちにも責任があると意識する市民がどの程度いるのでしょうか?

今後はより大勢の市民が気軽に参加できる親しみやすい企画、アイディアの必要性を実感するとともに、環境月間の行事や年間を通じた市民とのふれあいを考えた集会やイベントの配置も効果的です。(進藤礼治郎)

※ストップおんだん館-全国地球温暖化防止活動推進センター(JCCCA)の略称。2004年7月神谷町にオープンした学習施設で、体験プログラムと教材貸出も。

『府中基地跡地』に国立衛生研が移転

府中基地跡地利用問題（その2）

府中基地跡地利用問題については、「NPO法人府中かんきょう市民の会」は平成14年6月に府中市長宛、「緑地空間」として長期的展望にたって今後の都市計画、まちづくりの一環として、市民との対話を重視して計画づくりをするよう要望してきました。（本誌の2005年秋号・10月12日発行で取り上げました）

この中で特に「国立医薬品食品衛生研究所（国立衛生研）」の移転問題に触れ、平成14年8月に建物の規模、高さをはじめ研究内容、バイオ施設（病原体、遺伝子組み替えなどを行う施設）がもたらす安全面の問題点などについて積極的に市民に公表し、住民への説明会を至急に開催すべきである旨、市長に要望してきました。

国立衛生研が住民説明会を開催

説明会は平成18年3月17日、18日、20日の3日間、生涯学習センターで開催され、毎回100名程度の住民が参加して質疑が行われた…当会からは毎回数名が参加、衛生研側は幹部約10名が出席し「移転計画の概要」説明を行った。

〔主な説明内容〕

①研究業務とその役割（表参照）

医薬品・医療機器、食品・食品添加物及び生活関連科学物質について、品質、安全性及び有効性を正しく評価するための試験研究を実施する。

②移転の背景

世田谷区上用賀にある現在の衛生研は昭和21年に設立され、建物も老朽化し、施設全体が手狭になっている。国の行政機関等の移転等に関する閣議決定によって移転の対象となり、平成元年8月に「国の機関等移転推進連絡会議」で府中市に決定された。…当会の調査では、同年11月には府中市議会「基地対策特別委員会」に衛生研が業務説明を行っているし、また平成13年には財務省、東京都、府中市、厚生労働省の4者で移転計画について打合わせを行っている。

③移転計画の概要

(1) 移転施設：敷地は約55,000㎡、建物は延床面積で約47,000㎡、職員は200名程度。

(2) 近隣環境への配慮：日照、通気等に配慮し、建物は敷地の中央寄りに配置する。また動物実験施設内の空気はフィルターでろ過した後に洗浄・脱臭し排出する。

(3) まちづくりや景観に配慮した開発を目指す。

(4) 移転の時期は平成24年度を予定。

(5) 安全対策としては次のような施策を考えている。（抜粋）

- ・施設は耐震強度の高いものとし、火災、ガス漏れ等による災害防止のための監視室を設置して監視を徹底する。
- ・施設内には焼却炉は設置せず、廃棄物処理施設で処理できないものは専門業者に委託して処理をする。
- ・毒物等は、鍵のかかる堅固な容器に保管し、転倒防止措置を行う等、災害時においても十分な安全性を確保する。
- ・食中毒菌等は冷凍保管庫に施錠して保管し、実験後は滅菌処理後に廃棄する。
- ・バイオハザード（病原菌、微生物などの漏れが及ぼす影響。生物災害）対策として、安全キャビネット内からの排気は特殊フィルター（ヘパフィルター）でろ過し、必要に応じて実験室内の空気も特殊フィルターでろ過し排気する。
- ・その他警備員による24時間体制で敷地内警備を実施する。

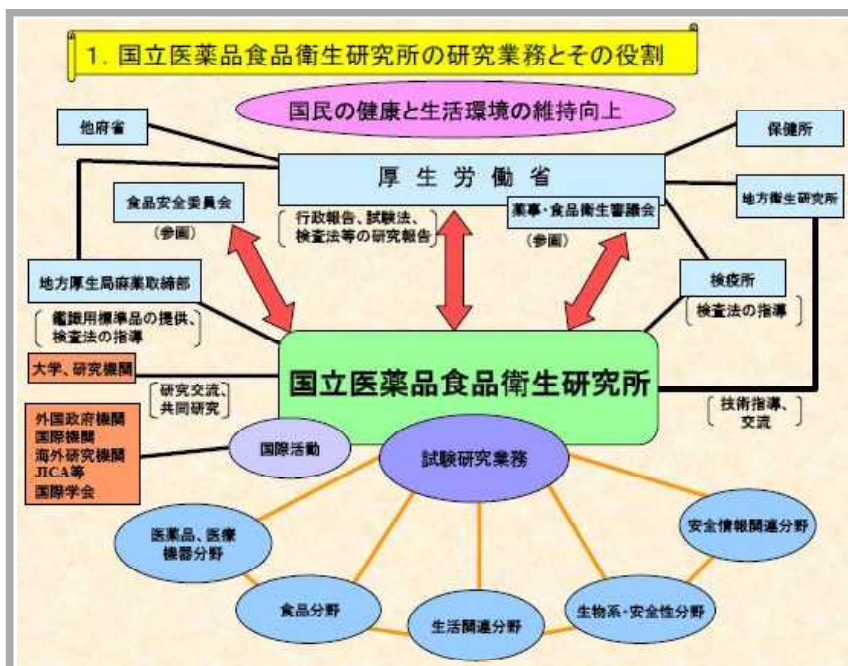
(6) 移転予定地は基地跡地の西側中央部に当たり、面積は5.5㍍を予定している。

③質疑応答

今回の住民説明会には当会より3日間にわたり5人が質問に立ち次のような意見並びに要望を述べた。

(1) 施設の安全性は100%安全か？

P3レベル（炭疽菌、結核菌、腸チフス菌等の病原体）の研究も行われると聞くと聞くと、新宿の感染予防研究所（過去住民が移転を求めて長期的な裁判が続いたケース）の様な事はないのか。



- (2) 市と安全協定を締結して欲しい。
市民推薦の専門家を入れて協定の内容を十分吟味し、形式的な安全協定にならないように配慮して欲しい。
- (3) 移転前に自然環境調査を実施して欲しい。
事前に動植物や土壌、ウイルス、微生物を含めた調査を実施して欲しい。
- (4) 樹林を残した景観の配慮を心がけて欲しい。
浅間山から続くグリーンベルトの存続を配慮して施設全体の設計を行って貰いたい。
- (5) 設備設計面で配慮して欲しいこと。
実験動物から出る臭気対策は万全を期したものにし、危険性が高い実験は地下室で行う様な配慮を望む。

住民説明会での評価と課題

- 3月の住民説明会で市民から提案、要望を受け、市および国立衛生研が如何に対応するか注意深く見守っていく必要がある。特に説明会が今回で終わる事なく、これからもたびたび開催されることを強く要望したい。
- 安全協定の締結に市民が十分関与していけるか、自然環境調査をどれだけ事前に実施できるか等について引き続き要望していく必要がある。
- 施設の設計図案ができた時点で市民に公表して、樹林を残した景観がどれだけ配慮されているか確認する必要がある。

今後に向けて

今回の国立衛生研の住民説明会は今一盛り上がりにかけていた。説明を受けた住民は過去のいきさつや、なぜ府中に移転して来るのか全く知らされておらず、いきなり施設の説明を受けても良く理解できないようであった。

ここにきて初めて住民を交えての問題認識が新たになり、これから本質的な動きが期待できる環境となったといえる。

それにしても市の対応は全く無責任である。今回の住民説明会でも衛生研にすべてを任せることなく、事ここ至った背景やいきさつについて市が初めに住民に説明すべきであり、国が勝手に移転を決めた事で市は関係ないという事ではおさまらない筈である。移転が決まったのは平成元年であり、この間市は国に対して何を要望してきたのか、移転決定について市民にこの問題をどのように公表してきたのか、市民の安全と健康を守る市の重大な責任について、市はどのように考えているのか、全く理解できないことばかりである。

市民の会としては平成14年から4回にわたり市に要望書の提出や市長への面談を通して意見具申してきたが、何一つとして前向きな回答もなく、国の施設だからとの理由で具体的な動きを敢えて避けてきた感は否めない。

今回の住民説明会で市民から提出された数々の要望や意見をどのように受け止め解決していくつもりか慎重に見守ってゆく必要がある。(市政への提言活動委員会)

府中 田んぼの学校2006 開校

バケツ稲で自宅観察も

府中 田んぼの学校は2年目となり、5月20日に開校しました。今年もお借りした東京農工大学の農地で、同学と用水組合のご指導で田植えをしました。ほかにも企業や団体のご支援を得ています。

当日は台風の影響で天候が危ぶまれましたが、台風一過の好天に恵まれ五月晴れの下で行われました。今年は一人ひとりが「バケツ稲」を育て、生長経過(草丈と分げつ数)を記録することに挑戦します。

30名の募集に対して49名の応募があり、抽選で44名にしました。5名の方々には涙を飲んでお断りをしたそうです。それでも44名を受け入れ大盛況です。また、昨年参加した方が11名で、楽しさ、珍しさも手伝ってか、その人気ぶりがうかがわれます。

小学校低学年の子どもが多く、田植えはまさに「田んぼのお祭り」で、大はしゃぎしながら、可愛い手足をいっぱい伸ばして田植えする姿はほほえましいものでした。

今年の特徴のバケツ稲とは、文字通りバケツに早苗を植え付け、そのまま自宅で生長させ、稲を収穫しようというものです。昨年は数名がチャレンジし生長記録を残したのですが、今年はみんなが行い、日常的に田んぼでは味わえない体験をしてもらおうというわけです。

田植えの後で付き添いの父母も一緒になって、草丈と分げつ数を測ることなど、バケツ稲の育て方を熱心に聞きました。そして約8kgの培養土(黒土と赤玉土の混合土)



東京農工大農場（武蔵府中税務署前）で5月20日

をエッサエッサと持ち帰りました。

今後、第2回目を7月15日に…生長観察とトンボの羽化の観察、第3回目を8月5日…生長観察と稲につく虫の観察、第4回目の稲刈りを9月30日、第5回目の収穫祭を10月28日に予定しています。参加者が稲の観察を通じて自然を学び、親しみ、親子がスタッフと共に喜び、楽しめるようにスタッフ一同願っています。(田中 正仁)

「ヒガンバナ救出作戦」が完了

地域と連携して下堰緑地よみがえる

2005年「会報秋号」で「ヒガンバナ救出作戦」を寄稿、多くの方の賛同を得たが、4月13日の植栽をもって、作戦は完了した。この活動を通じて地域の方とのコミュニケーションを持つことができ、大変有意義であった。

計画を進める中で、市側から平成17年度に「用水延長工事(多摩川に抜ける緑道の整備)」の連絡があり、会では工事にあわせ計画を修正した。この作戦は市の公園緑地課に提案し、賛同を受けながら、地域の方にご協力いただき、清掃3回、ヒガンバナ救出1回、ヒガンバナ植栽1回、延べ39人のご協力で達成することができた。

今年の9月末頃には開花が見られる。また4～5年先をみすえた環境問題として、この緑地の府中用水ヒガンバナの元祖を見守って頂きたい。(ヒガンバナについての詳細は2005年「会報秋号」参照)



分球しないと広がらないヒガンバナ

ヒガンバナの救出

自生しているヒガンバナの生態に興味を持ち、必ずこの下堰緑地に四谷用水ヒガンバナの元祖(本家)があるはずだ、と仮説をたて、(①移動できる手段は、球根が上流から流されてきた。②用水最上流取水口に一番近い株のヒガンバナが祖元祖に当たる)その株から分球(分家)が始まったと考えられることから、元祖探しを始めた。

取水口から約80mの用水路法面に参加者が元祖と認める株を発見した。かなり深いところにあった32球で、痩せて細く首長の二重根となっている球も見つかった。この元祖株は、工事中は業者に保管してもらい、工事完了後に会で引取り、4月13日に分株し発見位置に戻した。

また、元祖株の一部についてやはり用水の最上流に位置して、「繁栄を見守るに相応しい場所」との意味から分球し入口2ヶ所に植栽した。さらに、四谷村の面影の残る四谷尋常小学校跡地(現四谷公会堂)に分球して、元祖の繁栄を祈り植栽した。

地域との連携

清掃活動には、地域の多くの方々に参加いただいた。わずかな期間であったが地域の方と、環境問題や隣接する西友跡地の利用など、問題を共有する良い機会であった。また今後、この「緑地の維持」についてどうするのか? という問題にまで発展。今後は「地域の方を中心にした活動に、会として参加・支援」してゆきたい。

さらにこの緑地を、地域ならびに市民の憩いの場となるよう期待し、活動を継続しようとの意見一致を見た。

(田上 昌宣)



多摩川側の公園入口に球根「元祖」を移植してやる

府中用水ヒガンバナ元祖の発見

この緑地には、ニセアカシア、ムクの木が覆い茂り用水路の面影が残った緑地であったが、倒木などがあり市が間伐した経緯がある。ヒガンバナ救出の対象を①緑道にはみ出した球根、②木の根っこに這い上がり浮上根と化したもの、③用水法面で落下しないように多重根と化しているもの、と定めて、ていねいに西側の法面(ゴミ処理後)に移植した。また緑地には他にも珍しい植物が芽生えるので、四季を通して注目していきたい。決して外来植物を持ち込まず自生植物に陽を当てた、豊かな緑地としたいと願っている。



ヒガンバナの移植に参加した人々(4月13日)

府中かんきょう市民の会 平成18年度総会を開催

NPO法人府中かんきょう市民の会は平成18年4月12日(水)に平成18年度の「総会」を開催いたしました。

当会は平成11年4月に設立し、今年度で8年目に入りました。設立当初は10数人で細々と活動しておりましたが、現在では50名を越える会員数となりました。また、平成16年10月には東京都よりNPO法人各を取得し、活動の領域も広がり特に毎年4月に開催される「レンゲまつり」は春の風物詩として府中市民の間にもすっかり定着してきております。このような経緯の中で18年度の総会が開催され、次のような議案について審議されました。

役員の改選について(第1号議案)

平成18年度は役員(理事、監事)の任期満了を迎える年度にあたり、事前に開催された理事会で選出された役員について審議されました。

現在まで理事長を勤めていた大崎清見氏と藤井由紀子理事が退任され、新たに新理事長として現副理事長を勤めていた進藤礼治郎氏が理事長に昇格し、副理事長には現事務局長の竹内章氏が新たに就任し事務局長を兼任することで承認されました。

また、新理事として梅沢みどり氏と田上昌宣氏がそれぞれ就任する事で承認されました。更に、理事長を退任されることになった大崎清見氏は今年度より新設された相談役に就任され、引き続き会の運営にご支援をいただくことになりました。

平成17年度の事業報告並びに収支決算について(第2号議案)

平成17年度は12の事業を実施する事ができました。主な事業は次のとおりです。

①レンゲまつりの開催。

昨年(2006年)の4月23日(土)日陰が欲しくなるような晴天の中で約600名を越えるお子様づれの市民の方が花かざりや、わらぼうしづくりなどの昔懐かしい伝統的な遊びを楽しんでいただきました。

②田んぼの学校(米づくり体験)を開催。

農地保全活動として、米づくり体験をして頂く為に「田んぼの学校」を開催致しました。東京農工大の実験田の1部をお借りして6月から7回シリーズで、田植えから稲刈り、そ



総会で選出された
新理事長の
進藤礼治郎さん

して取れたお米でおにぎりをつくり皆で試食会を行いました。

③市民ボランティアによる環境調査の実施。

市から委託を受けて、大気汚染(NO2)測定、野鳥観察、小川の生き物調査、武蔵台公園の樹木観察などを市民ボランティアの参加をいただき実施致しました。

④ホームページの開設。

昨年(2006年)の9月に府中かんきょう市民の会のホームページを開設致しました。

ホームページの内容としては、①府中の環境と景観(大国魂神社、浅間山、府中崖線等の紹介)②当会が開催するイベント案内③当会の主な活動紹介(環境を守るための組み)④当会の年度毎の活動実績紹介⑤その他入会案内や当会が発行している会報の紹介などとなっております。今年の5月末で1000件を超えるアクセスがありました。

収支計算についてはほぼ予定通りの収入と支出となり翌期への繰り越し金も前期より増加し、順調に推移しております。

平成18年度の事業計画並びに収支予算について(第3号議案)

今年度の事業計画は17年度の事業をほぼ継続する内容となっています。特に重点的に推進する活動として基地跡地利用に関する政策の提言、市から委託を受けて実施する市民との環境調査、地域住民と進めている四谷地区に整備された下堰緑地にヒガンバナの群生地をつくる事業などがあります。

収支予算については収入で前年度より17%、支出で23%あまりアップしており、事業の内容を充実させながら、いかに支出を削減していくかが課題となっています。

(府中かんきょう市民の会 事務局)

4月29日の「みどりの日」には恒例の「グリーンフェスティバル」が市内のすずかけ公園で開催され、当会からは3回目の出展となりました。今年は残念ながら生憎の曇り空となり、牛乳パックのリサイクル工作「サンバイザー」と「うちわ」作りは「まあまあ」というところでしょうか。「みどり」と無料配布の「落ち葉堆肥」に人々の列が出来ていました。展示内容をご紹介します。

●紙パック工作

サンバイザー、紙トンボ、飛び出す生き物、コマ、うちわの5種類の作り方を指導しました。紙パックは重要な資源ですから回収してトイレットペーパーに再生するのも大切なことですが、おもしろいアイデアを生かして「省資源・省エネ」に努めてはいかがでしょうか。

府中グリーンフェスティバル



「環境学習」を出展



●松ぼっくり工作

動物の顔、怪獣、クリスマスツリー、くだもの等。最近松の木が少なくなりました。松ボックリもなかなか見当たりませんが、農工大に松の木があるのです。松ボックリで何が出来るか。松ボックリにも表情があって、動物の顔に見えたり、クリスマスツリーに相応しかったり、大変おもしろい素材です。

●ロハス(LOHAS)チェックシート

チェックシートはおもしろいですよ。点数を計算して楽しんでいます。LOHASとは Lifestyles of Health And Sustainability の頭文字です。アメリカが発祥地で、人間の健康と地球の持続可能を考えた生活様式を意味しスローライフに似ています。かしこく生きましょう。(大草郁子/環境カウンセラー)



わが友 ミツバチとともに

矢 島 威(東京都養蜂組合長)

出会いは小学生の頃から

ミツバチとともに五十数年過ごしてきた私にとって、ミツバチは今流行のペットであり、いちばん親しい友達でもあります。

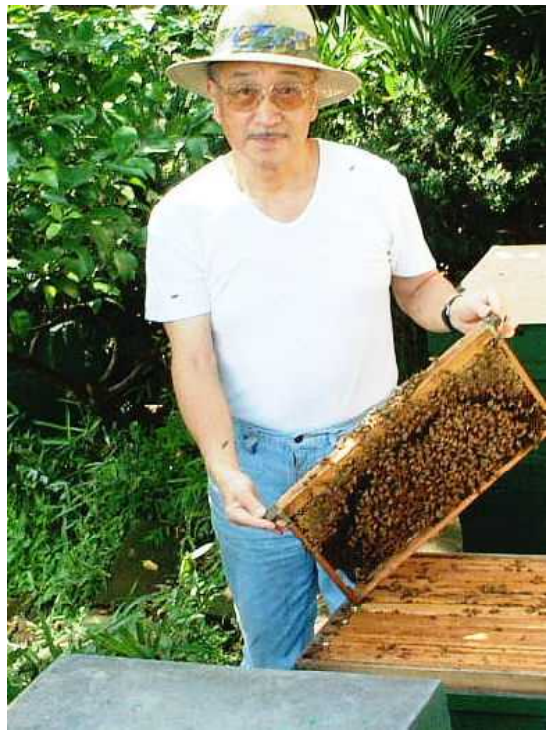
物心ついた頃から昆虫に興味をもち、土を入れた6号水槽の中にアリの一群を入れ、砂糖や毛虫などを与え、巣の中の様子を観察したり、夏はホタル、秋にはトンボたちが、少年の頃の私にとっては唯一の友達でした。

小学校に入学したある日、祖母に連れられ多摩川の近くにある伯父の家を訪問した折のことです。広い庭にミツバチが10群ほど飼われ、一列に並べられた巣箱に、それぞれ自分の棲家を間違えることなく働いているのを見て驚いてしまいました。

これを期に一人で自転車に乗って伯父の家に通い、蜂群の脇に一日中座ってミツバチの様子を観察することが楽しくてなりませんでした。

昭和23年、戦後の日本には砂糖が全く無く、一大養蜂ブームが訪れました。そこで親を説得し、一群の種蜂を購入することが出来ました。

首を長くして待ちに待ったミツバチ4枚群(10枚群で一人前です)が我が家に届いたのは、何と5月29日でした(専門家でしたら、越冬明け1群の蜂群から、この時期までに、少なくとも5群の種蜂をつくる事が出来ます)。



愛蜂と私

徳田先生といえば、当時は蜜蜂研究の第一人者でしたが、事もあろうにアポなしで千葉県の実験場・蜜蜂研究室に先生をお訪ねしました。先生から幼稚な私の質問に、快くお答えいただきましたが、若気の至りとはいえ、今となっては「冷汗千斗」の思いです。

昭和20年頃の府中は、JR南武線の線路を境に南は多摩川まで殆どが田圃で畑も点在していました。5月の大祭の頃は丁度レンゲが満開で、ピンクの絨毯の先に多摩丘陵が連なり富士の霊峰も一体となって、それは夢のような光景でした。

彼らから計り知れない恩恵受ける

ミツバチは巣から溢れるばかりの美味しいレンゲ蜜を運んでくれました。

以来、長年に亘るミツバチとの関わりを通じ、私はこの小さな昆虫から計り知れない恩恵を受けることが出来ました。そして、そのコロニーにおける一糸乱れぬ生活史のなかで、驚くばかりの英知を彼らから学ぶことが出来ました。なかでも彼らが集め醸成した蜂蜜、花粉、ローヤルゼリー、プロポリス、その他の素晴らしい天然生産物は我々人類に対する最高の贈り物と言っても過言ではないと思います。

わが国においては、経済高度成長期を境に急速な都市化、利便性の追求と引き換えに私達の周りから自然が遠のいていってしまいました。昔、私たちの身近にいた沢山の昆虫も激減し、現在、ミツバチは唯一のポリネーター(花粉交配者)として、7000億円もの経済効果を持っています。

彼らのために私はもっともっと沢山の花(蜜源植物)を増やしてやりたいと思っています。



ピンクの絨毯、広大なレンゲ畑(都立農業試験場・2003/04)

時節柄とはいえ、種蜂は大変高価でして、周辺の土地が4町歩(1万2千坪)も買えた値段でした。土地高騰の現在では到底考えられないことです。

私としては、ただ嬉しくて、寝ても覚めてもハチのことで頭が一杯でした。

当時はミツバチに関する参考書は皆無に等しく、唯一、徳田義信博士の「蜜蜂の飼い方」を頼りに養蜂実習に励みました。